

人口減少の地域社会に求められる新たな価値創造力

—クロージング—

株式会社日本総合研究所 理事長 翁 百合

ただいまご紹介いただきました翁です。シンポジウムのクロージングに当たりまして、一言ご挨拶させていただきます。

今日は、多くの皆様に会場までお越しいただくとともに、オンラインでもご視聴いただきまして、誠にありがとうございます。また、お忙しいところ、パネリストの皆様からは大変貴重なお話を聞かせていただきまして、厚く御礼申し上げます。

コロナを機に、世界も、日本も、社会が大きく変化しており、地域社会にも大きな影響を及ぼしています。観光などに大きく依存していた地域の経済が打撃を受けた一方で、本日もお話が出ましたが、DXが進み、リモートワークも広がって、人々の意識も大きく変化してきていると思います。ダイバーシティへの意識なども着実に変化してきていると感じています。このようにコロナによって人々のライフスタイルや意識が変わるなかで、これからの地方創生の手法も、従来通りの発想ではなく、大きく変化させる必要があると感じています。

そうした問題意識で本日、シンポジウムを開催させていただきましたが、パネリストの皆様のご議論をうかがい、無形資産や人的資本などへの投資をしっかりと行っていくこと、また、多様な人たちが活躍できるようなダイバーシティの機運を盛り上げて、その土壌をつくっていくこと、そして、地域社会内外の主体・人々間の連携で地域イノベーションを起こしていくこと、こうしたことの重要性がコロナ後の地方創生において明確になってきたと思います。

また、地方創生の旗手となるべき自治体の方々、企業経営者、さらには大学、西村先生の在籍する三重大学がある三重県は大変幸運である、と思いますが、こうした方々が新しい時代の変化に意識を研ぎ澄ませて、そして柔軟な発想で新しい課題に対応していくことの必要性、こうしたことも確認できたと思います。

本日のパネリストの皆様からは、地域で活躍する女性や中小企業の経営者の覚醒といった具体的な取り組みを様々ご紹介いただきました。大変興味深い内容だったと思います。やはり私自身も、企業へのアプローチ、それから人へのアプローチ、この二つが必要ではないかと思っています。

まず、地域の企業については、先ほど対面・非対面の話が出ましたけれども、コロナ後のビジネスモデルにおいて、DXはもはや必須です。DXというのは、デジタルのトランスフォーメーションだけでなく、コーポレートのトランスフォーメーションも含む概念だと思っています。ビジネスモデルをどの



翁理事長

ように持続的に変えていくかという視点から、生産性を高め、付加価値の高い商品・サービスを提供していくことが不可欠であると思いますが、そこでキーになるのが、やはり人への投資やネットワークによる協業ではないかと思います。こうした取り組みを、自治体や大学が連携してサポートすることが重要となってくると思います。

第2の人へのアプローチですが、本日、とくに議論で印象的だったのは、地域に住むすべての世代の人たちに着目して、その人たちのアイデアや潜在的な力を発揮できるようにしていくアプローチが、これから重要になってくるということです。アイデアのある人が事業を立ち上げること、社会的な課題に気づいた人たちが動こうとしていることをサポートする、こうしたことがとても大事ではないかと思います。

自治体や企業だけでなく、金融の側面でも、現在、ソーシャル・インパクト・ボンドやクラウドファンディングなどの形でサポートするということが可能になってきていると思います。地域においても、リモートやシェアといった形で、多くの人々が時間を有効に活用して働くことができるようになってきていますし、人の数自体は少なくなりますけれども、一人ひとりが潜在的な力を発揮して魅力的な豊かな地域社会を作ることができるのではないかと、少し希望が見えてきたような気がします。

そのためには、何よりも自治体や地域社会のリーダーの方々の発想が極めて柔軟になることがとても大切になってきます。加えて、デジタル化のおかげでこれまで不可能と考えられていたようなことが、可能になってきているわけです。当然、地域の枠を超えた連携も可能になり、そうした様々な社会変化を前向きに捉え、新しいことに挑戦していくことが大事であると感じました。

弊社は、税制や労働市場、社会保障、金融、デジタル社会の構想など、様々な分野の研究に取り組んでいます。そうした取り組みを地方の抱える課題と掛け合わせて、それで解決策を提示すべく、これからも努めていきたいと思っています。

私たちとしても、本日のシンポジウムの内容を十分に活かして、さらに研究を深め、様々な提言を試みていきたいと思っています。本シンポジウムが、ご参加いただいたすべての方々が地方創生を考えるうえでの何かのヒントになりましたら、大変うれしく思います。

これで本日のシンポジウムを終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

(了)